
言葉の彼方へ

美憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉の彼方へ

【Nコード】

N6893Q

【作者名】

美憂

【あらすじ】

人なんて離れたら忘れてしまうもんやんって俺は思ってる。それでも誰かと一緒に居たくなるのは、なんでなんやろ？
大人になりきれない男って本当に厄介w

15の秋 再来 く修也

誰にも思い出っというものはある。

たった15年しか生きてない俺にだってあるねん。

一番ちっさい頃の思いでは・・・そうやなディズニーランドで見たパレードの赤く目の光る黒い化け物が怖かったってことかな。

カーさんがそれからずっと、俺が悪いことする度に「そんなんしたら赤い目のおっちゃん来るで」ってゆうて脅かしてはったわ。

3歳ぐらいやったから、あれはほんまに怖かったなあ。

それ言われたらどんなに遊びたくても早く寝たし、お菓子もつと食べたくても諦めたわ。

まあ、それくらい怖かったって事や。

そっからいっぱい思い出っというもんはあるねんけど。

中学入るまでは前から2番目にちっこかったし、女みたいな顔やからどこ行っても「おねーちゃん」言われたり。

6年ときやつたかな、クラス的女子と交換日記してたのをねえちゃんに見つけられてカーさんに言いつけられたり。

最近はこの間の高校の文化祭まで、そりやもうたくさんあるねん。

でもな。

とーさんの思い出は9歳までしかないねん。

一緒に暮らしとったん9歳までやからな。

俺ちっこかったからな。9歳までってゆうてもあんま覚えてないねん。

覚えてるのはいつもお酒飲んでるとーさんやねん。お酒飲んでるか寝てるとーさん。

それしか覚えてへんねん。

しょーじき、他覚えてないねんなあ。

それがなんとなくやけどな。

最近ちよつと寂しいなあ思うようになってん。

俺にかてへこむ時とかあるやん？

そついう時思うねん。

とーさんやったら、大人やったらどうすんのかなあって。

え？かーさん？

かーさんに聞いてみて？

それは・・・無いわ。

かーさんとかねえちゃんに言うのははずいやん。

しよばい事でへこんでるねんもん。

女にゆうの、はずいやん。

一応俺かて男やねんで？女に心配かけた無いやん。

だから無理やねんけどさ。

とーさんに聞いてみたかったなとか思うわけやねん。

聞いてみたらええやんって？

それがな・・・あかんねん。

俺のとーさん4年前に亡くならはってん。
だから聞かれへんねんなあ。

ああ。謝らんとってーや。
別に謝ってもらうようなことでもないし。

俺かわいそうがられんの好きちゃうしな。
そんなつもりでお前に話したんちゃうで？

なんかわからんけど最近そう思っって事や。

・・・それだけの事やねん。

20年前の会話をふと思い出したのは、昨日姉ちゃんが持ってきた
葉書のせいやなと俺は思った、

実家に届いてたって持って来てくれた葉書は高校の同窓会の案内や
った。

幹事の名前は俺の高校のときの親友で。

でも親友というにはおこがましいほど会ってへん奴の名前やった。

こいつとは高校3年間ずつとつるんで・・・やけど卒業してから
は全く会っていない。

それはもう親友とは言わへんな。
だったら・・・知り合いか？

俺は複雑な思いでその名前を見つめた。

15の時にした話をこいつは覚えてるんやろか。

少し考えて俺は笑った。

俺でさえさっきまで思い出しもせえへんかったのに覚えてるわけないやん。

俺のことすら覚えてるかどうか。
ま。そんなもんやろ。

あの時は楽しかった。そやけど離れてしもたら忘れるもんやん？

・・・それでも。

いつもやったらそのまま葉書なんて放置のはずやのに。

捨てませんとPCデスクの上に葉書を置いたのは・・・。

「・・・俺も年取ったてことなんかな。」

俺は一人呟いて、珈琲を飲み干すとジャケットと鞆を持って玄関へ出た。

思い出つて奴に對面してみたくなつたんかもな。

「あ。やべ。遅刻する。」

すこしおもつくるしい「感傷」とかつて奴を振り切るように俺はドアを開けた。

それでも。

20年近くぶりの再会なんてのもええんちゃうかなって心の隅では思いながら。

掛け合う　　瑞穂

修也の姿が見えたので、あたしは読んでた単行本を閉じる。

この喫茶店に入って読めたのが10ページやから、修也は5分の遅刻。

「ごめん少し遅れたわ。」

「修也にしては早かったほうや。5分やからな。」

「なんや嫌味っぽいなあ。ま、ごめんやで。」

いつものように掛け合いながら修也はあたしの前に座ると、水を運んできた女の子に珈琲をオーダーした。

地下街にある喫茶店は、休日やから結構席は埋まっていた。

それぞれに結構な音量で話しているせいで、かえって他の人に話は聞こえないもんなんよね。

だから大阪人って声が大きいのかな、なんてあたしは思った。

「あ。これ、先に渡しとくわ。」

修也は黒い鞆の中から薄いファイルを取り出すとあたしに差し出した。

「これで大丈夫やと思う。よお出来てたで。」

「ほんま？このまま提出していいんかな？」

フリーになって初めての確定申告。

書類の出来が心配で修也にチェックをして貰った。

「うん。プロが言うんやから安心せえや。」

修也は税理士だ。多分本当に依頼したら結構な顧問料とやらを払わなあかんのやろな。

・・・今回は甘えてしもたけど。

「ありがと。」

「それにしても瑞穂、独立一年目にしちや頑張ってるやん。ライターってそんなに食っていけるもんやないやろ？」

「どうなんかなあ。他の人のことはわからんけど・・・何とかって感じやな。」

あたしはフリーのライターだ。雑誌にいくつかの連載を貰っている位のまだまだしょぼい物やけど。

元々はただのOLやったんやけど、書くことが好きでつらつらネットでブログなんか書いてるうちにそれが本になってしもた。書くことが仕事になるなんて思ってもみいへんかったけど、それが縁で本業になってるんやから人生どう転ぶか判れへんもんや。

まあ、今書いてるのが「恋愛の営業力」なんていう連載物で・・・って事は、一人もんのまま今年32になるあたしには痛いところやけど。

「それでもえらいわ。俺にはできん事やからな。数字やったら何とかなるけど文章書くのはあかん。小学校の頃から作文は苦手やったしな。」

二つ年上の修也がそう言いながら笑う。

その笑顔が小学生の修也を連想させた。

「作文と一緒にするのはどうなん？」

「似たよくなもんや。」

「ちゃうわ。」

ああ。大阪人の会話って何でこんな笑いながらきついこと言えんのやろ。

文字にしたら多分喧嘩してるのかって思うような会話なのに、これが心地ええのやからたちが悪い。

考えてみれば修也とは知り合った頃からそうやった。
何となく楽って言うのかな・・・。

掛け合いがうまく行くというのか。

これ、あたしにはすごく大事なことやねん。

「とりあえず、これで頼まれてた用事は終わったんやけど・・・。」

その言葉にあたしは心がちくりとする。

そうやねん。

これであたしが頼んでた用事は終わってしもた。

いつも優しい修也やから、頼んだら断れへんとあたしはわかってて頼んだ。

・・・修也に会いたくて頼んだ。

もう用事あれへん。

「・・・どないしよか？まだ時間あるん？」
「あるっ」

あ。思いつきり肯定してしもた。

あたしの気持ちバレバレな感じがして恥ずかしくなった。

修也はまた、あたしの好きな優しい目をして笑った。

「そか・・・なんかしたいことある？」

したい事・・・。

したい事・・・なんやろ？

「・・・したい事なあ。なんでもええ。」

「いっつもそればかりやな。たまには瑞穂も考えてや。」

したい事なんかあらへん。修也と一緒に話してただけやねん。
・・・やばい。32の女の言うことやないわ。

恥ずかしすぎて言葉に出来へん。

「・・・思いつかへん。」

「ほんなら帰るか？」

「それは嫌や」

はあ。修也は短いため息をついてみせた。

「わがままなお嬢さんやなあ。」

「だって思いつかへんねんもん。」

修也がおってくれたらそれでお腹いっぱいなんやもん。
・・・絶対に言えないけど。

「そやなあ・・・。じゃあ選んでや。」

優しく笑いながら修也は続ける。

「1番このままここでしゃべる。」

1つて、人差し指を立てて。

「2番ぶらぶら町を歩く。」

「歩いて・・・どうするん？」

「それは歩きながら考える。」

あたしはつい笑ってしまう。
でも修也は続ける。

「3番映画に行く。」

「なに見るん？」

「今から調べる」

携帯を取り出す。

見たい映画あったかなあ・・・。

「でもな映画見てたら話はできへんけどな。」

あ。それは・・・。

「・・・嫌そうやな。」

見透かされた。

「じゃあ3番はなしと。」

なんか修也が楽しんでいるような気がしてきた。
そう思うとあたしも楽しくなった。

「こんなことしてるうちに時間がたつんやな。」
「それさえやん。」

だつて修也が目の前にいてるから、それでええねん。

「そうか。それでええのか。」

修也はまた笑った。

嗤う　く修也く

ああ。俺、笑えてたやん。

瑞穂と別れて家に帰る電車の中で。

俺はそのことに気付いて自分で少し驚いた。

笑おうとしてるんじゃない。笑えるんじゃない。

瑞穂といると笑える時があるねん。

・・・いつもは笑おうとしてるんじゃないけど。

瑞穂とは喫茶店で他愛ない話を2時間ほどして、少し早めに飯食って別れた。

2時間も何話すんやって感じやけど、最近こういう事が多い。

いつも瑞穂とはただ何となく話をしてるだけ。

それでも瑞穂は嬉しそうやからいいんじゃないと思う。

それになんか・・・俺も楽しいねんな。

楽しなかったら確定申告を来月に控えたこの時期に、貴重な休みの数時間を使ったりはせえへん。

瑞穂といるのは楽だ・・・と思う。

瑞穂は俺が担当している会社の経理課のOLやった。

もう5年ぐらい前になるかな。瑞穂が毎月帳簿を届けにきてくれたのが始まり。

毎月会うから何となく話すようになってんな。

他の女の子みたいに気を使わんでええのが楽やった。

それでも個人的に会うようになったのは瑞穂がフリーになってからかな。

相談したい事があるので・・・って事務所に電話貰ったときは正直驚いた。

だって、普通のOLの子がライターになるって・・・びっくりするやん。

それも本出すから、税金がどうなるのか教えてほしいとかって言うし。

あ。瑞穂の本は貰ったけど表紙からして女の子向けやったから読んでない。

・・・瑞穂には内緒やけどな。

「ただいま〜っと。」

誰もおらん部屋やのについてしまっうのは、いつもの癖だ。

俺はジャケットを脱ぐとベッドに投げて、冷蔵庫を開けるとペットボトルのブラック珈琲を取り出し、グラスに入れた。

一日にとんでもない量の珈琲を飲んでるけど、他に飲むものがないから仕方ない。

まだ今日は休みだからいいほうや。下手すると打ち合わせやなんかで一日に十杯位飲む事もある。

グラスを片手にベッドの前に座り込むとテーブルの上で携帯が二回

ブルった。

・・・メール着信。瑞穂や。

『今日は貴重な休日にも有難う。助かりました。おやすみ。』

こういう所さすがに元OLやなっと思うわ。 氣遣いって言うん？
俺も返信を返す。

『明日からしばらく休みなしやわ。』

『ほんまに？ごめん。休みゆっくりできへんかったね。』

『気にせんとつて。大した事してへんし。』

『ほんまに有難う。忙しくても体に氣をつけて頑張ってね。風邪引かんよ。』

・・・最後の言葉にちよつと心があったかい感じがした。

『ありがとう。そっちもな。』

メールは三往復。そしてなくなる返信。

切り上げ時がいかに瑞穂らしいって俺は思った。

・・・そして俺は今も「笑えて」るんや。

こんなやり取りで自然に笑みが浮かぶから不思議や。

TVをつけて見たかった訳でもない映画を流す。

何年か前に流行った恋愛映画がただ流れてた。

・・・瑞穂は俺が好きなんやろな。

珈琲を口に含みながらふと俺は思った。

あ。なんか俺すげ〜うぬぼれてる奴みたいやけど。

でも、好いてくれてんのやろなと思う。

いつも誘いがあるのは瑞穂から。

俺の負担にならんように探るような誘いをかけてくる。

会えば、嬉しそうに笑う。

いつから瑞穂がそうになったのかは解らない。

でも多分これは俺の思いあがりなんかやなくて。

瑞穂は俺を好きなんやろう。

俺からしたら、俺みたいなんのどこが・・・って思うけど。

俺やったら俺みたいな奴、嫌やけどな。

・・・そう思つて俺はちよつと自虐的に笑う。

だつて俺はずるい。

瑞穂の気持ちに答えるかどうかなんてことも考えんと、瑞穂に会うんや。

俺は・・・どうなんやろ。

嫌いやない。それは確かや。

嫌いやったら会ったりせえへん。

でも好きかなんてことはわからへん。考えへん。

でもその時間が心地ええから、誘われれば会っ

・・・・きつと瑞穂も本当の俺を知ったら、好いてなんかくれへんやろな。

俺の中で、もう一人の誰かがそう言ってる。

いつか無くなってしまう「好き」なんて気持ちなら。

初めっから確かめへん方がええねん。

初めっから俺が瑞穂を好きなんかどうかなんて考えん方がええねん。

「ずるいな。俺。」

・・・・俺の中の誰かが俺を嘲笑った。

恋愛指南〜瑞穂〜

おやすみって送ってからさらに返信するなんて、うざくないかな。

あたしは少し携帯を持ったまま考える。

返信くれたってことは、返してもいいんやよね？でも最初に送ったのはあたしだから修也でメールが終わるのが普通なんかなあ。

ああ。はじめて好きな人にメールする中学生じゃあるまいし。いい年して何してんねんやろ。

でも返信してしまう。

今日が楽しかったからその余韻をまだ味わいたいような気がして。

・・・贅沢やな。

そう思ってあたしは自分にあきれた。

何をどうしたいとかわからへんけど、修也に関してはどうしようもないくらい悩む。

そして出来るだけ妥当に終われる所でメールを打ち切った。

正確に言えば、多分修也が妥当だと思ってくれるだろう所で。

「あゝ何をぐだぐだと」

声に出して自分でけりをつける。

今日は修也に会えたそれだけでいいはずなのに、何をこれ以上望む

っというんやろ。

この続きは湯船の中で考えよう。

「ふ〜」

浴室から出るとあたしは冷蔵庫をあけ、缶ビールを取り出す。

今日の夕食は修也と一緒にだったから、アルコールは飲んでないねん。

修也はお酒を飲まない。

飲めないのではなくて「飲まない」んやって。

初めて修也を会社の仕事以外で呼び出すのに成功した時。

あたしは「税金のことを教えて欲しい」って電話したわけなんやけど・・・。

修也はいきなりのあたしの電話にも快く返事してくれて、いろいろ教えてくれた。

あたしはそのお礼にと理由付けて「飲みに行きましょう」と誘ったんやけど。

修也は「僕飲まないんですよ。それでも良かったら飯食いましょか？」と答えた。

それから修也と一緒にご飯を食べるときはアルコールを取らない。

かれこれ、1年になるのかな。あれから。

修也はあたしが誘えば来てくれる。

ご飯でも、映画でも・・・甲子園球場でも。

でもな。

修也から誘ってくれたことはない。

相談すればのってくれるけど、修也に相談されたことはないねんな。
・・・まあ頭のいい修也があたしに相談する事があるのかって話やけども。

あんまり修也は人と付き合いたがらないのかも知れへんな、と最近思う。

出会った税理士事務所でも事務所では冗談も言うし話はしてたけど忘年会とかそういうのには参加せえへんって事務の女の子が言ってた。

とつつき難い事もないし、どちらかといえば話しやすい人やのに。

でも。

話せば話すほどどこかの地点から近づけへん気がする。

それを感じたのも最近のこと。

『いい年してお友達もないもんやわ』

そういった親友の美弥の言葉を思い出してあたしはぐいつと缶ビールをあけた。

でも。それ以上入れてくれへんねんもん。しゃーないやん。

「しゃあないやんか」

・・・思わず声に出してしまった。

PCを立ち上げて自分のブログへ入ってみる。

「・・・あう。」

ブログ経由のメールが7件。

皆あたしのブログの読者さんや。

『恋愛の営業力』なんて本を出しちゃったもんやから、恋愛相談のメールが毎日やってくる。

・・・それなのに。

当の本人はこの一年『お友達』から抜け出せないでいる32歳女子やで。

情けないったらありやしない。

「人様の事やったらわかるのになあ。自分の事となったらあかんなあ。」

やべ。最近独り言が多くなった。

あたしの本の2章目にこんな言葉があるねん。

「独り言を言う女はモテない」

ああ。あたしの事やんつ。

・・・やばい。やばすぎるっ。

文字で恋愛語るのとは簡単なのに、リアルな恋愛は文字のようにはいかへん。

あたしの読者様たち・・・。

ごめんっ。

動き出す　く修也く

風呂から上がると、携帯がテーブルの上で青く光りながら震えていた。

11時。

こんな時間にかけてくるのは、かーさんかねーちゃんぐらいのもんやけど。

ディスプレイに並ぶ番号は、全く見覚えのないものやった。

「・・・はい」

「夜分恐れ入りますが、吉岡修也さんでしょうか？」

タオルで髪を拭きながら出た電話の相手は、聞き覚えのない男の声やった。

「はい。そうですけど」

「・・・吉岡あ？俺、わかる？」

「・・・なんや馴れ馴れしいやつぢやな。

「って、わかる訳ないか。俺、安川。高校で一緒やった安川浩二」

「・・・やすかわ・・・こうじ。

「・・・って安川っ?！」

俺がそう言つと、電話の相手は安心したように笑った。

「覚えとつてくれたか？ごめんやで急に電話して。」

「いや、それはええねんけど……。どないしたん？何でこの番号わかった？」

安川浩二は高校3年間一緒にクラスやった、まあいわば親友、だった奴。

卒業以来連絡もせえへんのを親友と呼んでええかは悩む所やけど。

「さつき吉岡のご実家に電話させてもらてん。お母さんいてはって教えてくれはった。吉岡今一人暮らしなんやってな。今電話大丈夫やったか？」

そう気遣う安川の声を聞きながら、俺はひよろりと背の高い丸顔の安川を思い出す。

勿論服装は詰襟のままだ。

「大丈夫やで。んで、どないしたん急に。」

「16、7年ぶりか？あのな、吉岡のところに同窓会の案内……。届いてる？」

……。同窓会。

その単語を聞いて、とっさにPCデスクを振り返る。

「……。届いてる」

届いてるわ……。確かに。

ただ届いたその日から放置してるけども。

そしてその葉書に幹事として『安川浩二』の名前があったことも、今俺は思い出した。

「ごめん。返事返してへんかったな」

「いや、ええねんで？ただ場所の予約もあるから、連絡つくようなら聞こうおもてこんな時間やけど電話させてもろただけやねん」

10数年ぶりの・・・正確に言うと17年ぶりの安川の声は、のんびりとしていて高校生だった頃のそれとなんら変わらなくて。

俺をあの頃の俺達に戻そうとする。

「で、どない？参加できそうか？」

「そやなあ・・・」

俺は裸のままソファーに座り、少し考えた。

行けなくはない日にちである事は確認済みや。

でも、行って学生の頃の思い出に直面して・・・それで？

そんな思いが渦巻きかけていた。

「・・・吉岡？都合悪いんか？」

「そうやないけど」

携帯の奥で安川がふつと笑った。

「都合悪いんやったら、出て来いや。久しぶりやん」

ああ。いつもこいつはそうやったつけ。

俺が一線引こうとすると、するりとそれをすり抜けてこっちへやって来るんや。

昔の連れってすごいな。一瞬であの頃に戻るんやな。

「ほんなら、一回2人で会おうや」

昔の感慨にふけってる俺に、安川はあっさりとそう言った。

「2人で？」

「おう。今週末あけとつてくれや。昔話に花でも咲かそうぜ」

「・・・お、おう」

そこまで言われて、断る理由はなかった。

俺が昔の思い出とやらに浸りだしてる間に、金曜日17年分年を取った安川と俺は再会を果たす約束になっていた。

「吉岡人見知りやからな、とりあえず俺と会ってリハビリしろや」

などという有難い(?)言葉と共に安川の電話は切れた。

「・・・高校の同窓会？」

その週の木曜日。

「明日晩御飯でも行かへん？」と電話をしてきた瑞穂に、俺は安川と再会する事を話した。

3月の終わりの週。確定申告も落ち着いただろうと見計らっての、

瑞穂らしいタイミングの電話やった。

「そうやねん。幹事やる連れと同窓会の前に一回あおかっていう事になってな」

「そかそか。久しぶりの再会なんかな？」

瑞穂の声は（少しがっかり・・・でもそれは出さないように）って感じの声で。

・・・バレバレやけどな。

そう思つて俺はまた少し笑つた。

「17年ぶりかなあ。高校出てから会つてないからなあ」

そう言いながら、またもや俺は（それは連れとは言わんやろ）と自分で突っ込む。

「だから明日はあかんねん。ごめんやで」

「あ。ええねん、ええねん。時間あるんやつたどうかなあって思っただけやし？」

・・・残念やわ。瑞穂の声はそう言っていた。

俺すごく思い上がつてゐたいやな。自分でもそう思つけど。

俺がそう思つてて欲しいと思つてるのも知れへんな。

・・・だから。

「瑞穂がいいんやつたら明後日晩飯いこか？」

・・・思えば。俺から誘うのは始めてかもな。

瑞穂が息を呑むのが携帯を通して感じられた。

「ええのっ?!」

「瑞穂がええんやつたら」

俺はまた珈琲を含みながら笑う。

「うんっ。大丈夫。じゃあ土曜日に」

「場所はこの間のサテンでええか？」

「りよ、了解っ。時間は？」

「・・・じゃあ、5時、かな」

そして俺はまた、笑っている。

・・・瑞穂の弾むような声を聞きながら。

心の声　く瑞穂く

・・・にやけてる。

鏡なんか見なくても自分でわかる。

昨日の電話からずっとにやけっぱなしだった事。

「目の前でへらへら思い出し笑いしんといてよ」

美弥が缶ビール片手にあたしをからかう。

「そんなにへらへらしてる？」

あたしは美弥が持つてきてくれた鳥のから揚げに箸を伸ばしながら言った。

「・・・まあ自覚してるけどね」

「自覚してるんやん」

1本目の缶ビールを飲み干してそう言う美弥もニヤニヤ笑う。
そして冷蔵庫から2本目のビールを取り出した。

「まあね」

「そりゃあ、えーと1年だっけ？ずーっと誘い続けて、やっと向こうからお誘いがあったんだもんね。浮かれもするやんなあ」

「正確に言つと向こうが誘ったってわけじゃないかも知れんけどな」

「まあ物事は良い方にとつたもん勝ちやで」

そついうと美弥はうんうんと頷いて見せた。

昨日。修也と電話したあと。

美弥から飲みに行こうとメールで誘われたあたしは、その方がゆっくりにできるからとうちへ誘ったのだ。

高校を出てすぐに主婦になった美弥と飲めることはあんまりない。年に2、3回が良い方だ。

「理紗ちゃんは今度中学やつけ？」

理沙ちゃんというのは美弥の一人娘ちゃんで、春休みだということで旦那さんの実家に泊まりに行ったらしい。

そのおかげで、ママである美弥はあたしとゆっくり飲もうというわけだ。

「そうそう。もうな、あたしが一緒に行くとおばあちゃんに色々買って貰えへんから一人で向こう行ってあまえたい放題してるねん。

ま、こっちは瑞穂とゆっくりできてありがたいけどな」

「そうやね」

「恋愛話なんか自分ではもう何年前？って言う話やもんね。ワクワクするわ」

・・・ん？

「・・・美弥面白がつてるやろ？」

思わず眉をひそめながらそう言つと、美弥は緩やかに笑いながら言つた。

「面白がってるというより・・・羨ましいんかな」

「・・・羨ましい？何で？」

「あたしはな、何て言うのかなぁ・・・そんな風に誰かのことを思
って浮かれたり、誰かを誘うのにときどきしたりって、そういうこ
とからはなれて長いからさ」

そう言いながら美弥は、何となく遠くを見るような目をした。

「だから、瑞穂が羨ましいんかも知れんわ」

「・・・羨ましい、なぁ」

あたしは高校時代に大好きと言って憚らなかった彼氏を、旦那にし
ている美弥の方がよっぽど羨ましい・・・ぞ。

「瑞穂にとつたらそりゃあもう羨ましがられるどころか大変なんや
で！って話やるけどな」

また缶ビールを一口あおって、ふうと美弥派ため息をつく。

「ときどきできるうちが華なんやで。一番楽しいねんで」

・・・そんなもんなんかもなぁ。

「・・・なるほど」

「大体一緒に暮らしたらドキドキもワクワクも無くなるねん。嫌や
な〜って思うことなんかどんなに惚れた相手でもあるねんから」

「・・・そ、そうなんや」

「当たり前やん！」

美弥・・・お酒強くなったなあ。

さらにぐいっとビールをあおる美弥に、あたしは気圧されながら。

「うちの旦那だってそうやで。付き合ってた頃は頼りになるって思ってたのに、いざ結婚してみたら只のはったりヤローでさ」

「・・・う、うん」

「あたしには偉そうに言うくせに、お義母さんには口答え一つもできへんしさ」

「・・・そ、そうなん？」

ビールの酔いも手伝ったのか、美弥の思い出し怒りは収まらない。

「付き合ってる時は王子様でも家族になっちゃうと見えてくるものが・・・」

「ちょ、ちよつと待って、美弥。独身者の夢を壊さんといて」

「・・・あたしだって、夢は夢、現実が現実ってわかってるけどな。さすがに経験者に語られるときついわあ。」

「・・・あ」

思い出し怒りも収まったのか、照れ笑いを浮かべると美弥は「こほん」と咳払いを一つして。

「瑞穂の夢を壊そうと思ったわけじゃないんよ。ごめんな」

「もー結婚するのが怖くなったら美弥のせいやで」

あたしは笑いながら自分のビールに口をつけた。

まだ夢は見たい、とは思う。

あたしは一緒に暮らした人はおらんから理想ばかりになってるか

もしれんけど。

「でもなあ瑞穂。夢を壊したら悪いけど」

美弥がいつになく真剣な目であたしを見た。

「・・・石橋叩いてるばかりやったら、いつまでも渡られへんで」
「・・・」

「石橋叩いているうちに、叩き壊さんようにな」

・・・ずきつときた。

石橋・・・叩いてるだけなんやろか、あたし。

「石橋を叩き壊す・・・」

「待つてるだけじゃ進まんぞ」

「待つてるだけのつもりは無いねんけど・・・」

そう言いながらも視線が下を向いていく自分が自分を一番わかっているのかも知れへん。

そんなあたしに、美弥は優しく言った。

「瑞穂、人にはテレパシーなんか無いやん？」

・・・へ？てればしい？？

唐突に出てきた単語に、脳内変換が間に合わず思わずきょとんと美弥を見つめる。

「テレパシーなんか無いから、心の声はちゃんと相手に言わないとあかんぞ」

心の声はちゃんとやわないと・・・テレパシーなんて無い・・・。
美弥の言った言葉が、頭の中でリフレインする。

「・・・なるほどなあ」

素直に納得してしまったあたしを見て、美弥が美味しそうにビールを飲んだ。

「ほんまにどっちが恋愛本の作家かわかんわ」

「・・・あたしが作家や」

「瑞穂、なんやったら今のうちがうまいこと言つた奴、次の本に使ってもいいで。貸したるわ」

そついうと美弥は笑いながらまたビール一缶空けた。

「さあ、腹を決める為にも今日はたっぷり飲んでたっぷり食べるねんで！」

冷蔵庫をあけて新しいビールを取り出しながら美弥が言う。

「・・・まったく。この酔っ払いめ。」

「せっかくこの美弥さんが、美味しいお料理を持って来てんからね。食べてや」

元気付けようとしてくれてるのがわかって、
ただどあえてお礼なんて言わなくて良い。

それが美弥とあたしの20年の繋がりがから。

「よし！食べるでっ」

「あ。でも」

気合を入れたあたしを美弥の右手が制した。

「明日王子様とデートの人は美弥さん特製餃子はやめといた方がいいなあ」

・・・あ。

目の前の美弥特製餃子はうちに来てから焼いてくれた・・・あたしの大好物で・・・。
食べるとじゅわって肉汁が出ちゃう、美味しい餃子で・・・。

「なぐんてねっ」

指を咥えそうならい悲しく餃子を見つめたあたしに、いたずらっぽく美弥は笑った。

「明日デートなんてものを控えた人に持ってくるのに、この美弥さんがお預けくらわせるわけないじゃん」

・・・？

「本日の美弥さん特製餃子にはんにく抜きバージョンなので、安心して召し上がれ」

そう言うと美弥はあたしに右手でピースサインをして見せた。

過去への思い　く修也く

17年って長いのかな、短いかな。

金曜日の居酒屋。少し多い客の喧騒の中。

俺は目の前に座ってる相手を見ながら考える。

17年分大人になってる安川は、ほんまの所、携帯がなかったら見つけられなかったと思う。

10代だった頃のイメージで探してたんやから、当たり前やけど。

俺の目の前にいるのは30代半ばのジャケット姿の男。

「お前は変わらんなあ」

そついつて安川は笑ったが、17年前の俺なんて俺自身も覚えてへんから肯定も否定もできへん。

「税理士なんや。お前昔から計算早かったもんな」

35歳になった俺たちは、その年代にふさわしく名刺交換をする。それもなんだかくすぐつたいような気がして。落ちつかへん。

「安川は鉄工所継いだんか。まだ若いのに社長なんてすごいやん」

安川の親父さんは鉄工所を営んでいたっけ。名刺には「安川精工代表取締役」とある。

「まあ俺一人っ子やったしな。社長言ってもちっさい会社やで」

そう言いながら照れくさそうに安川は笑う。その安川の笑顔に少し昔の面影を感じた。

安川とは高校3年間いつも一緒にいた。偶然毎年同じクラスやった。あんまり目立たない俺とは対照的に、安川はクラスのムードメーカー的な奴やった。

今となつては何でつるむようになったんかも忘れてしもた。

ただ、高校時代を思い出せば隣にこいつが居た事は確かや。

「なんかあれやな、吉岡がスーッ姿でおるんが不思議な感じやわ」

「それは俺かて同じや。学ランやない安川にまだ慣れへんわ」

敬語を使うような相手ではないのに、使っていないことに違和感がある。

それが・・・17年の時間つてもんなんかな。

オーダーを取りに来たバイトの店員に、安川は生中を、俺はウーロン茶を頼んだ。

「あ、吉岡は飲まれへんのか？車か？」

「いや・・・車やないねんけど。俺飲まれへんねん」

・・・本当は飲まれへんのやなく飲まへんのやけど。

その辺の事情はあえて今説明するべきことでもないと思つた。

「・・・そうか」

そう答えた安川は、ほんの少し何か言いたげにしたような気がした。

「ああ。ノリがわるうてごめんやで？ 気にせんと飲んでや？」

いつも酒の席で俺が断るといわれる台詞を先回りして言ってみる。
まだ世の中には「男が酒も飲めんとは付き合いが悪い」と思う人間もいるから。

「あつたり前やん。17年ぶりの連れとの再会やで。嬉しいて飲ま
ずにおれるかいな」

連れ、か。

いともたやすく俺を「連れ」と言い切つて安川はビールジョッキを
取り上げた。

「ほら、乾杯っ！」

・・・まだ、俺はその響きに居心地の悪さを感じていたんやけど。

そこからは、同じクラスやつた奴の近況なんかを話してくれた。

俺は大学が関東だったこともあり参加してなかったが、何年かに一
度くらいは数人で集まっていたらしい。

実家をそのまま継いだ安川は、さすがに地元だけあって、その後も
同級生たちと交流があるようやった。

とはいえ、俺が思い出せへん奴の名前もあつたが。

俺自分から話しかけるほうじゃなかったしな。

おそらく安川だって向こうからかまってけえへんかったら、付き合いもなかったかもな。

そんな俺に安川は、いろんな高校時代のエピソードと共に、クラスのやつらを思い出させようとしてくれる。

こいつ昔からなんか面倒見の良い奴やった。

俺はそんなことを思い出す。

人って見かけは年食っても、中身は基本的に変わらんもんなんかも知れんな。

安川のジョッキが3杯目になる頃。

少し顔の赤くなった安川が、申し訳なさそうに言った。

「吉岡悪いねんけど、煙草吸わせてもろてええかなあ？」

「ああ。勿論気にせんと吸ってや？」

煙草を吸わない俺に氣遣っていたのだろう。

ポケットから煙草を取り出すと、火をつけ、心からうまそうに煙を吐いた。

「やっぱり酒飲んでの一番は最高や。嫁はんに怒られるけどなあ」

「奥さんは禁煙しろって言いはるんか？」

「俺とこ去年子供産まれてん。だから嫁はんが妊娠した時から家では吸わへんのや」

そう照れくさそうに安川は言った。

まあ、それもそうだよな。

俺も35になるんやから、安川に子供がいてもおかしい話やない。

でも自分がまだそんな年になっていることに自覚がなかった、というか。

・・・ある意味、俺は軽く衝撃を受けていた。

「・・・子供が居るってどんな感じなん？」

思わず、そんな馬鹿げた質問をしてしまう。

「そうやなあ。何ていうんやろな。なんとも可愛いな。うん。守つたらなあかんともしんうし・・・子供おるから頑張れることもあるし・・・そういう意味では俺が守られてる気もするしなあ」

そういう安川が何とも大人に見えて、俺は少し怯んでしまう。

同じ年やのに俺には追いつけない所に居るような気になる。

「そうかあ。俺にはまだまだ考えられんわ」

そういった俺に安川は少し遠くを見ていた視線を戻した。

「・・・あのな。俺吉岡に会えたら言いたいなあ思ってたことがあるねん」

「俺に言いたいこと？」

安川は俺を見つめたまま続ける。

「俺のこの子が生まれたときな、あ、うちの子男の子やねんけど。こいつが生まれた時、俺吉岡の親父さんの話し思い出したんよ」

・・・俺の親父の話？

「俺なあ、子供が産まれた時大きくなったらこいつとキャッチボールしたい、もっと大きくなったら酒飲みたい思てん。んでな。吉岡が高校の時話してくれた事があつたやん。お前の親父さんが亡くなつてあんまり話したことないって」

「そんな話したような気もする・・・」

「うん。んでな、俺その話思い出してな、お前の親父さん残念やつたやろなあつて思つたんよ」

「残念？」

「そうや。多分お前の親父さんも俺と同じ様な思い持つたと思うねん。お前が産まれた時にな」

・・・そうなんやるか・・・。

俺は今では顔すらうる覚えになつてしまつた親父を思い浮かべた。

いつも酒ばかり飲んでる親父やつた。

酒飲んで俺らにちよっかいかけて母さんに叱られてた。

そんな親父を恥ずかしいと思つたことさえあつた。

酒を飲む親父が嫌いだった。飲んで浮かれる親父が嫌だった。

・・・だから酒は絶対に飲まないと思ってきた。

「・・・キャッチボールなんかしたことあれへんかったで」

そう呟く俺に安川はうなづいて見せた。

「でもな、多分吉岡が産まれた時親父さんは俺みたいに思ったと思うで。それでな、俺が残念やって言っただのはそれができへんかった事やないねん」

もう一度うまそうに煙を吐きながら、親父の表情をした同級生は言った。

「お前が産まれた時に思ったことを、お前に伝えられんと亡くならはったんちゃうかな、それが残念やったやろうなって俺は思うねん」

・・・そうなんやろか。

親父も俺が産まれた時にそんな夢をもっていたんやろか。

「それをな・・・お前に会えたら言いたくなって思ってた」

そう言うと安川はにっこり笑ってジョッキを持ち上げた。

うまそうにビールを傾ける光景を、俺はなんだか懐かしいような気持ちで見つめていた。

踏み込む　く瑞穂く

・・・なんだかいつもと違うような気がしてた。

喫茶店で待ち合わせ。

修也が数分遅れてきたのも、ごめんって笑ったのも、珈琲を頼んだのもいつものとおりだった、けど。

・・・何か違う。

あたしはさっきまでしていた、友達的美弥の話をふと切って修也を見つめた。

「あ・・・つと、どないした？」

修也はふつとあたしに視線を戻して尋ねる。

・・・そうや。視線を戻したんやわ、今。
戻したってことは、外れていたって事で。

それはいつも話を聞いている修也ではありえない事。

「修也、なんかあった？」

多分今までのあたしやったら聞かなかったことやと思う。
それを聞いたのは、昨日美弥が言ってくれた『テレパシーなんかない』って話のおかげ。

「なんかって？」

「うん。気のせいかも知れんけど・・・修也なんかいつもと違う気がする」

あ。やば。

黙り込む修也を見て『言わなきゃよかった』いつもの弱気なあたしが出そうになる

「・・・ごめん気のせいかなっ」

また自分でごまかして。・・・修也のテリトリーを犯さないように。修也の無言のバリアを感じるのはこういうところだ。

「・・・いや、なんかなあ」

珈琲を一口含むと修也は照れたように笑って見せた。

「昨日高校の時の連れに会ったって言うたやん。そいつ結婚して子供もできててさあ」

「そうなんやあ」

・・・まあ。修也の年齢だったら普通だよな。

「うん。なんやろ、ちょっとショックだったって言うか」

「ショック？」

「俺はまだ結婚とか子供とか考えたことなくてさ」

・・・う。なんだがずどんと来たで。

やっぱりなって思いながらも、何だ、このずどんって感じは。

もちろん修也と結婚とか考えていたわけやない。まだそこまで思いは届いてへん。

・・・でも。

自分がショックを受けたことで、自分の本当の気持ちを知ったような気がした。

「・・・そうなんや・・・」

呟くように相槌を打ちながら、あたしは水の入ったグラスを口に運ぶ。

唇をつけてできた水の波紋に意識を集中して、修也の言葉にショックを受けていることを悟られまいとする。

・・・あたし、上手くできてるだろうか。

「うん。独り身は気楽だしね。35にもなって何寝ぼけた事ゆうとんねんって感じやろ？」

そう言って修也に笑われてしもたら、あたし、笑うしかないじゃない。

「ほんまやわ。ええ年してがきんちょみたいな事ゆうとったらあかんで」

・・・半分冗談。半分本気。

男はいつまでも少年だってね。・・・いつか自分の本の中で使ったフレーズを思い出す。

そんなフレーズに逃げてんじゃねえぞ、こら。と意地悪な気持ちがあたしを襲った。

目の前の大人の姿をした少年とやらは、何も気付かずいつもの笑みを浮かべている。

「そろそろ飯、行くか？」

「あ。あたし生中ください」

飲まないくせに、ゆっくりできるからと言って何度か行った居酒屋。

ドリンクのオーダーを取りに来た男の子に、修也がウーロン茶を頼む。

いつもなら「あたしも」と言っただけど、なんだか今日は言いたくなかった。

「瑞穂って飲めるんだ？」

意外そうな顔をして修也があたしに尋ねる。

「飲めるよ。だから最初に誘った時飲みに行きましょって言ったやん」

「ああ。そやった。そやけど一回も飲まへんから、飲めないんやと思ってた」

・・・飲まない相手に合わせてただけです。

お絞りで手を拭きながら、また心の中の声がする。美弥さん、これも言つべきですか？

「修也も飲めば？飲めないわけじゃないんやろ？」

枝豆と、唐揚げと、刺身の盛り合わせと・・・なんて、飲みもしないのに酒の肴を注文した修也に、あたしは言ってみる。

修也はあたしのビールジョッキに目をやり、そして少し困ったような表情をして。

「うーん。俺はええわ」

「なんで？弱いのか？」

「弱いかどうかもわからん。飲んだことないし」

ええ？飲んだことがない？

「一回もないのか？」

「うーん。学生時代に何回か、一口二口はあるけどなあ」

「で、弱かった・・・とか？」

真っ赤になっちゃったとか、べろべろになっちゃったとか。ま、まさか、何かすごい醜態さらした事があるとか。

あたしの中に色々な想像が渦巻く。

「いや、そんなことはないねんけど。なんか、怖いやん」

・・・へ？怖い？？？

あたしがよつぽどきよとした顔をしていたのだろう。修也は少し笑いながら恥ずかしそうに頭をかいた。

「アルコール入ると、何て言うんかな、気が大きくなるって言うか

そんな感じになるやん」

うんうん。それはわかる。

それがまた、良いところでもあるんだもん。

「何でも言いそうになるし」

・・・あたしは何でも言ってほしいぞ。

「余計なことまで言うてしまうかも知れんやん。それが怖い気がする」

・・・。

なに。それ。

あたしが今まで感じてたのは、これだったのか。

修也が発しているような気がしていた、見えないバリアのようなものの。

「・・・そうやって」

あたしはいつもなら言わない気持ちを声に乗せる。

・・・だって、あたしは今アルコールが入っているから。

余計なことを言っちゃうのかもしれない。

「そうやって修也は、今まで人と一線引いてきたんだね」

驚いたようにあたしを見た修也の目が、初めて笑っていなかった事にあたしは気付いていた。

自覚する く修也

・・・いっせんをひく？

いきなり瑞穂に言われた言葉が理解できへんかった。
というか。

頭の中で変換できなかった、というほうが正しい。

「そうやって修也は人にバリアを張ってるんやな」

きつい言い方をしてるようでいて、瑞穂の表情は悲しげに見えた。

「・・・バリア？」

「うん。いつも何か修也にはバリアを感じてたような気がする、あたし」

ああ。まただ。

俺は思う。女の子にそんな風に言われるのは初めてやない。
何度か言われた事がある。

35年間誰とも付き合ったことがないわけやない。

・・・俺だって男やから。

いいなって思うこともあるし、一緒におりたいて思うこともある。

なんだっけ、同じような事を言われた覚えがある。

「・・・何に怖がってるん？」

きつといつもの瑞穂だったら言わなかったのだろう。
今日はアルコールが入ってるから、だから言える事。

それだからこそ、多分本当に言いたかったこと。

「怖がつてるんかな、俺」

「そう見える。修也は何か怖がつてるような気がする」

瑞穂はきつと、『文章を操るもの』としての感覚で俺が気付いてない俺を知らせようとしてる。

それは『数字を操る俺』にはわかり辛い物かもしれない。

「さつき結婚とか考えてないっていったやん？」

生中をもう一杯頼んで、瑞穂は本気で飲むモードになり。

「考えたことがない」

「今まで一回も？」

「ないなあ」

はあ。瑞穂はため息をつくとやってきたビールに口をつけた。

「修也はなくても相手の人はあったかも知れんやん」

「・・・あつたんかもな」

無意識にそう答えて、自分が過去にそんな相手がいた事を認めたのだと気付く。

瑞穂は傾けたジョッキを一旦止めたが、そのまま俺に目をあわさずに煽った。

そしてテーブルにガタンとそれを置くと。

「そうか」

何かに納得したように瑞穂はうなずき、そして俺が一番聞きたくない言葉を放った。

「修也解つてて知らない振りしたんやろ？」

俺を見る瑞穂の目の縁が赤い。

酔っている・・・だけど、何かそれだけじゃないような気がした。

ああ。

こういう時に人は酒を飲みたくなるのかもな、と初めて俺は思った。

自分で気付きたくなかった、自分に隠していたことを突きつけられた時に。

逃げるように飲んでしまいたくなるのかもしれない。

・・・親父もそうやったんか？

今は全く関係ないのにそんな思いが浮かぶ。

でも、今俺の前にはアルコールはなくて。

ウーロン茶煽るだけじゃ、逃げようもあらへん。

逃げようもない。

何から？どこへ逃げようとしてんねん、俺は。

「・・・ごめん余計なこと言ったわ」

黙ってしまった俺をどう受け取ったのか、瑞穂が低い声で搾り出す

ように言った。

「・・・別に謝らんでも」

俺はそう返すのが精一杯で。

「ごめん。こんな風にずかずか踏み込むから、酔っ払いは嫌やよなあ。修也がお酒飲むの嫌がるのも無理ないわあ」

そんな俺に瑞穂は明るく笑いながら言う。

俺でもわかるような・・・ちつとも笑ってない声で。

「いや、そういう事じゃないねん」

「あたしに関係ない事やのに、なに熱くなってるねんやろ。あほやなあほんまに」

だから、そうやって笑わんとってくれ。

関係ないとか、言わんとってくれ。

「いや、そうじゃなくて」

「やつぱり止めといたら良かったな、ウーロン茶にすれば良かった」
「瑞穂」

「お水たのもつかなあ。あかんあかん女の酔っ払いなんて最低やわあ」

「違うって」

店員を呼ぶブザーを押そうと伸ばした瑞穂の左手を、俺の右手が掴む。

驚いたように俺を見上げた瑞穂が小さく呟いた。

「・・・ほんまは解ってたんやろ？」

そう言った瑞穂の目に浮かんだのは。

「酔い」じゃなくて「涙」だった。

「修也、あたしの気持ちも解つてて気付かん振りしてたんやろ？」

そこまで言うと、どんどん浮かぶ涙の玉が大きくなった。

そして、右目の涙が瑞穂の頬に流れ落ちた。追いかけるように左の頬にも。

・・・そうや、解ってた。

瑞穂の気持ちもちゃんと解ってたのに、気づかない振りをしていた。今までと同じように。

それだけやない。

俺は。

ほんまは自分の気持ちも解ってたのに、気付いてない振りをしてたんや。

気付いたら一緒に居なくなるから。

気付いてない振りしたって、一緒にいるのが心地いいと思ってしまったのに。

ずっと一緒に居れたらなんて思ってしまうのに。

それを解ってしまうのに躊躇したんや。

・
・
・
ずっとなんて、永遠なんて無いから。

囚われる　く瑞穂く

気がつかない振りをしてたのは、あたしも同じやわ。

酔いに任せて感情を晒してみたら、その後妙に冷静になっている自分を感じた。

涙はふた筋流れてしまったけど。

成すがままに流したことで、かえって落ち着いたような気がした。

・・・やっぱり修也も気づいていたんやね。

あたしが修也に惹かれていた事も、それを確かめる勇気も無い事も。

修也に掴まれた左手を振りほどく事も出来ず。

まるで何かのワンシーンのようやわ、とあたしは思った。

「・・・気づいてた」

搾り出すように修也が呟いた。

それと同時にゆっくりと修也の右手があたしから離れた。

・・・それが答えなん？その離れた右手が。

心には浮かぶのにやっぱり言葉に載せて確かめることは出来なくて。

「気づいてたのに答えを出されへんかった」

「それは・・・あたしの気持ちに応える事が出来へんから？」

そういった自分の声が震えているのに驚く。

確かめるってこんなに怖い事だったっけ。

「瑞穂の気持ちに応える事で、俺の中で大切な物が出来るのが」

一つ一つの言葉を自分自身に確認するように。

「それがいつか」

ゆつくりと、修也は言った。

「無くなってしまう事が、怖かったんや」

・・・無くしてしまう時の悲しみを知っているから大切だと認めた
くない。

なんて寂しい言葉なんだろう。

あたしは修也の言葉に寂しさと、そして一種の甘い痛みを感じる。
それはあたしを大切だと思ってくれていることの裏返しだと気づい
て。

「・・・修也は寂しくないん？」

やっと出た言葉は、これだけ。

どう言えば伝わるんやろ。

無くしてしまう事を考えるんじゃないで、無くさないでいることを
考えようって。

・・・無くした悲しみを、おそらく知っているだろう人に。

修也はあたしが知っている優しげな笑顔を、やっといつものように
浮かべた。

「寂しいなんて思わへんよ」

でもそれは、あたしは一番見たくない修也の笑顔だった。

「でもな。自分でも嫌になるくらいいやから、瑞穂も呆れるやろ？こ

んな俺」

やっと少しバリアの向こうに入れたと思ったのに。
そうやってまた、さらりと笑顔のバリアを張ってしまうんやね。

「修也は嘔吐きやわ」

「嘔吐き？」

「だって、そんなん寂しくない筈ないやん。バリア張って一人でそ
っちへ行ってしまうなんて」

そう言うのと修也の笑顔が少し変わった。

悲しみが目に浮かぶような・・・まるで泣き出すような表情に見え
た。

でも勿論泣き出す事は無くて。

そして、修也はテーブルの上で両手の手のひらを握り締めるように
組んで、あたしを見つめた。

「皆独りやん」

心が痛かった。

あたしを受け入れてくれなくても良いから。
そんな目をして笑って欲しくは無かった。

見え透いた嘔を吐いて、あなたは何かから何を守ろうとしてるの。

本当は寂しいんやん。

だからそうやって笑うんやん。

・・・相手からは離れていかないように。
嫌われないように。

「一人やないよ」

「独りやねん。たとえ家族がいても、いつかは独りになるんや」

そついうと修也は自分に何かを叩き付けるように、次の言葉を吐いた。

「俺の・・・親父みたいにな」

「・・・修也のお父さん？」

修也のお父さん。

お父さんだけじゃなくて、修也が家族のことを口にするのは初めてだ。

なんとなく。

修也自身も自分が「親父」と発した言葉に少し驚いたように見えた。

「何で今親父のことなんか言ってるねやろ、俺」

「・・・聞かせて」

修也のお父さんが何かの縛りになっているのだとしたら。

またバリアを張ってしまいそうな修也を、こちらに留めて置きたい。

あたしは今聞いておかないと、後悔しそうな気がする。

「え？」

「修也のお父さんに、何か思うことがあるんやろ？聞かせて」

「聞いたって面白い話じゃあらへんよ」

「知りたいねん。修也の思ってること」

そしてあたしは、笑顔まで浮かべて修也を見つめた。

「知っておきたいねん。あたしが好きになった人はどんな人なんかを」

・・・言っちゃった。

多分まだ少し酔いは残っているんだと思う。そうでなきゃ言えなかった事。

でも。

ここまで来たらうやむやにしたくは無かった。

・・・あたしは修也が好きなんやもん。

どれくらいの時間だったか。

修也は躊躇するように黙り込んでいたが、やがて諦めたように笑った。

「・・・瑞穂は言い出したらきかへんからな」

そう言つと、すっかり氷の解けたウーロン茶を飲み干し。

修也は話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893q/>

言葉の彼方へ

2011年9月18日11時04分発行